

まえがき

近年、少なくとも東京都心では、外国人を見かけることがとても多くなってきた。山ほどスイーツケースを持った家族が通勤電車に乗っている光景、知っている言語、知らない言語での会話、好奇心と落ちつかなさが入り交じったような表情の人たちなどに接することは、さほど珍しくなくなった。

また、息子を地元の小学校に入れてみて驚いたことは、片親、または両親が外国ルーツの子どもがこれまたそんなに珍しくはないということである。もつとあからさまに移民が多い地域よりは、それでもかなり少ないのだと思うのだが。

最初にニューヨークから戻ってきたときに住んだ場所との違いや、あるいはそのときは子どもがまだいなかったという社会での立ち位置の違いなどもあるが、その、戻ってきたときの2001年とは、約20年のときを経て、やはり隔世の感があると言つてよい。

私にとつて、20代半ばに始まったニューヨークでの生活は予期せぬものであり、思ったより長いものであり、しかし終わってしまったものでもあった。そこから得たものは大きく、また多岐にわたり、一つは心理療法家という「職業」であるが、その他にも数えきれないほどある。

ニューヨークにいたときはいわゆる「ニューヨーク本」的なものが嫌いだった。いまだにそういう気持ちはなくはないが、自分の数十年に及ぶこれまでの人生の中で、やはりそれ抜きに何かを語ることは難しいので、本書はそこからスタートすることになった。

今回出版のお話をいただいたとき、本来ならば心理療法、メンタルヘルス、臨床心理や子育てなどに絞って書くこともできたはずなのだが、「多文化」を選んだのは、やはり多文化・異文化の体験が自分の中でインパクトが大きかったからかと思う。ついでに言えば、臨床という専門分野で「本を出す」ということはだいたいおこがましいことであり、まだそこまでの経験や「見切り」はないと思っているのもあるかもしれない。

「多文化」という切り口も私の気の多さを反映してもいる。「専門」があるとはいえず、日本で称賛されるような「この道一筋」が比較的苦手であり、臨床のアドバンテージはいろいろな職業や背景の人と親しく接することができることにもある。あるSNSで、フランス語やフランス文化に興味のある人たちのグループに所属しているが、そこにはやはり「フランス・愛」な人たちが多く、行きがかり上は自分にはアメリカのご縁がもつとも深いのではあるが、どうも他の文化も諦めきれないのは気が多いからと、やはり文化というものが面白く、魅力的なものであるからだろう。

あちらに住むことをやめて戻ってきて約10年、あらためて日本に住んでみると、日本はやはり「東洋的」であり、黒船来航のときのように「異人」が来ても明確に自他の区別をつける、自他を定義する、比較検討するというようなアプローチは取らないようにまだに思っている。もちろん「異人」は「異人」なのだが……。結果、異文化の人たちは「なんとなく」そこにいるのであって、ある意味異文化としてちゃんと意識されない。

このまま「移民国家」「多文化社会」になっちゃっていいのだろうか？ 大丈夫なのだろうか？ という危機感や、老婆心のようなものも本書を執筆するきっかけとなった。この本はニューヨークのメンタルヘルス、親子関係、メンタルヘルスと多文化、言語や言葉、内外のいろいろな文化、異文化・多文化の実践などかなり雑多なトピックを網羅しているが、その中でどれか一つでも文化・異文化・多文化をあらためて考えるきっかけとなるようなものがあれば幸いだと思っている。ひとつひとつを独立した記事のように書いているので、おそろくどこから読んでいただいても大丈夫かと思う。

微力ながら本書がみなさまの視野や想像力、共感力、対人関係、行動半径などを広げる一助になってくれればと願う。